

# ヨーロッパ紛争としての三〇年戦争

清水良三

## 目次

はしがき

- 一 ボヘミヤの叛乱およびブアルツの征服時代（一六一八—一六二三）
- 二 デンマーク時代（一六二四—一六二九）
- 三 スエーデン時代（一六三〇—一六三五）
- 四 フランス時代（一六三五—一六四八）

## はしがき

三〇年戦争をドイツ史の問題としてではなく、ヨーロッパの問題として取扱った最初の歴史家はジョルジュ・パヂエスであったといわれているが、この戦争が単にドイツの戦争ではなくヨーロッパ全体の戦争であったことは、デンマークの参戦、スエーデンの参戦、フランスの介入などをみれば、一目瞭然のことであろう。この戦争はちょうど前近代の末期から近代の初期にかけての国際政治史にとって、近代国際政治史の幕あけを告げる序章をなす。宗教上の争いとしてはじまった戦争が、いつのまにか政治権力そのものの争いに転化して行くのである。それはドイツのプロ

テスタントとカソリック教徒との間の宗教上の争いとしてはじまったもので、それにスペイン、フランス、デンマーク、スエーデンが夫々の政治的理由から介入して行った。このようにしてドイツが三〇年間にわたってヨーロッパの戦場となったのである。そしてこの戦争の結果、ドイツは経済的にも知的にも大幅におくれ、その後、約二百年間も其の破壊的な影響力から脱却することが出来なかった。この戦争そのものはヨーロッパの歴史の中で、無意味な闘争の顕著な実例であると思なされているのである。だが、悲惨な経験は必ず反省を生み、反省の中から人間は種々様々な戦争対応策を考え出すものである。たとえば、フーゴー・グローチウスの主著・戦争と平和の法も、この戦争のさ中に書かれたものであった。この戦争は、単にグローチウスに対してばかりでなく、創成期の近代国際法の諸分野に決定的な影響を及ぼしたのである。<sup>②</sup>

# 一 ボヘミヤの叛乱およびプファルツの征服時代（一六一八—一六二三）

一六一八年から一六一九年にかけて、オーストリアのハプスブルグ王朝の支配を受けることに反対したボヘミヤのプロテスタントはプファルツの選挙侯・フリードリッヒ五世を、彼らの王として擁立しようとしたのであった。このフリードリッヒ五世はカルヴィニストであって、英国のジェームズ一世の娘・エリザベスの夫にあたる人であった。ボヘミヤのプロテスタントから、自分を王位に迎えたいという申し出でがなされた時、フリードリッヒ五世は、この「人の気持をくすぐるような」危険な申し出でを受諾した（一六一九年）。そして、妻のエリザベス王女（これ以後はボヘミヤの王妃）と共にプラークへおもむいた。だが、エリザベスが王妃としての地位を保ち得たのは、ごく短期間であつた。其の訳は彼女の夫・フリードリッヒ五世の軍隊が、一六二〇年十一月八日に、プラーク郊外約三マイル

のヴァイサア・ベルグ (Bila Hora) の戦闘において、バイエルンのマクシミリアンの率いるカソリック連盟とオーストリア軍の連合軍にやぶれてしまったからである。それから数週間もたないうちに、ボヘミヤとメーレンの大部分はマクシミリアンの軍隊の支配下に入った。<sup>④</sup>ボヘミヤのプロテスタントは、政治的宗教的自由を求めて、たたかいを始めた。<sup>⑤</sup>だが彼らのたたかいは、カソリック連盟軍に反撃の契機を与えたのである。かくて、近隣の諸領邦は順次この戦闘にまきこまれて行つた。フリードリッヒ五世は、まだ戦闘能力を持っていた多くの部下や、戦利品をうしろに残したまま、閣僚たちまでひきつれて、妻と共にブレスラウ (Wrocław, Poland) にむけて逃亡した。かくて捨て去られて行つたプロテスタントの運命は皇帝フェルディナンド二世の手中に握られることになった。だが、カソリック連盟から支持を得ていたばかりでなく、ザクセンのルーテル主義者たちからも支持を得ていた皇帝が、これらのプロテスタントに寛大な気持を抱くことなどは、あり得ぬことであつた。皇帝はボヘミヤ地域からプロテスタントを根絶しようとなさへ決意していたのである。<sup>⑦</sup>そして、彼のこの決意は、異教徒迫害の歴史において並ぶもののないほどの成功をおさめた。広範囲にわたる略奪と圧迫によって、この地域はオーストリアの支配下に入った。そして、これら新支配者たちはボヘミヤの農民たちを厳格な統制下に農奴化して行つたのである。次いで皇帝フェルディナンドはポールスグレイヴ (フリードリッヒ五世の英国内での呼称)<sup>⑧</sup>を「呪逐」し、追放破門として、プファルツの領土および選挙侯としての地位をバイエルンのマクシミリアンに与えた。マクシミリアンはカソリック連盟の首長であり、將軍チリーと共に、ヴァイサア・ベルグの戦闘において指揮活動を行つた最高責任者である。皇帝フェルディナンドのかような行動から生じて来た必然的な結果は紛争の場がボヘミヤからライン河の流域へ及んで来たことである。プファルツ地方は西ドイツにおけるカルヴィニズムの勢力の中心地でもあつた。フランスにおけるユグノーの叛乱を支援する

軍隊が派遣されたのは、この地方からであったし、また、スペインの支配権から脱却しようとするオランダの努力も、この地方からの支援によって可能になったのである。<sup>⑨</sup> 皇帝フェルディナンド二世は此の重要地をバイエルンのマキシミリアンに与えたのである。

## 二 デンマーク時代（一六二四—一六二九）

一六二五年にデンマーク王・クリスチャン四世が英国からの軍資金援助の約束を得て、この戦争に介入した。ルーテル派のプロテスタントであったデンマーク王の気持を、ドイツ帝国内の紛争に介入するよう呼び動かししたのは、プロテスタンティズムの宗教に対する熱烈な関心というよりも、むしろカソリック教徒の土地や財産に対する欲望であった。王は宗教よりも政治経済によって、感覚よりも地理的条件によって動いた。<sup>⑩</sup> デンマーク王の目的の中には、北部ドイツの司教区の収入から得られる息子たちのための相当多額の財産があった。<sup>⑪</sup> だが、このように教会関係の財産に対して欲望を抱くことは、決してデンマーク王だけの特殊な現象ではなかった。ブランデンブルグの北方および西北地方のプロテスタントの君主たちは、ドイツ内部のカソリック教系軍の優勢によって、彼らがそれまでに保持して来た教会領の安全がおびやかされると感じはじめていたのである。<sup>⑫</sup> それはまさに低地ザクセンの君主たちの間でひろく持たれていた危惧でもあったのである。そういう訳で、英国王からの勧誘もあり、クリスチャン四世にとって軍隊を提供し、遠征を計画することは難しいことではなかった。クリスチャン四世としては、ハプスブルグ王朝の勢力があまりにも海峡に近ずいてくることを恐れた。もしも皇帝の軍隊がズントにまで達するならばバルチック海への入口を扼されるからである。<sup>⑬</sup>

北方において斯様な状況が現われつつある時にカソリック側の軍隊の軍事的指揮系統にも、重要な変化が起りつつあった。ボヘミヤとブッアルツ地方における反宗教改革の軍隊の勝利は、フェルディナンド皇帝の指揮下にある帝国直属の軍隊の力に依るものではなかった。それはバイエルンのマクシミリアンの派遣軍の力によるものであった。皇帝が自分自身を防衛するために何時敵側にまわるかも分らない隣国の軍隊の援助に依存せねばならないというような状況はウィーンにおいて我慢出来るような状況ではなかった。帝国の政策を実施するためには、帝国の軍隊と帝国の指揮官が必要であった。この必要にせまられて、強力な謎のような人物が現われた。アルベルト・ヴェンツェラス・フォン・ヴァルトシュタイン (Albert Wenceslas von Waldstein) が其の人である。彼は普通ヴァレンシュタイン (Wallenstein) として知られている。彼の指揮官としての能力は対トルコ戦争で既に証明済みであった。占星術を除けば彼には宗教らしいものは何もなくあった。彼の富は巨大であった。彼は戦争で多額の利益を得、また、土地の投機でも多額の利益を得た。その他何事であれ、彼は接したもののすべてから利益を得た。<sup>15</sup> このヴァレンシュタインが自分自身の費用でフェルディナンドのために戦う軍隊を集めると申し出たのである。彼は其の時、条件として、戦場で獲得される大砲類や其の他の軍需品は皇帝フェルディナンドに引渡されるが、其の他の戦利品は彼の軍隊のものとなるということを約束させたのであった。彼は貧困な農民や兵士たちの心理をよく理解し、戦利品をよく分配したので、人望大いに集まって、彼の軍隊の勢は盛んであった。彼は、デンマークのクリスチャン四世の軍隊に対する戦いの最後の部分を指揮したのである。

一六二六年のプロテスタントの遠征は二つの別個の作戦から成り立っていた。その一つはトランシルヴァニア侯と協力して帝国防衛軍に対して行なわれる攻撃であり、もう一つはデンマークから南に向ってのカソリック連盟の軍隊

に対する攻撃であつた。東方進撃計画においてはプロテスタントの傭兵隊長の中ではもつともきわだつた存在だつたマンسفエルト (Peter Ernst Graf von Mansfeld) が、遠いボスニアの村落で戦死した以外に何らの成果も得られなかつた。デンマークから南に向つた軍隊は一六二六年八月二七日に、チューリンギアのルッター (Lutter) において行なわれた戦闘において壊滅的な打撃を受けた。この戦闘によつてティリー (Johann Tserclaes von Tilly) とヴァレンシュタインの軍隊の優勢が確立された。カソリックの軍隊はシュレスヴィツおよびホルシュタインへ向つて進撃し得ることとなつた。そしてこれ以降、デンマーク人は此の宗教戦争において重要な要素ではなくなつてしまつた。一六二九年五月クリスチャン四世は皇帝軍との間に平和条約を締結して、わずかに其の領土を保全することが出来たが、爾後の中立を約すると共に新教徒の保護を断念せざるを得なくなつた一方、皇帝フェルディナンドは一六二九年三月六日、ヴァレンシュタインの意に反して教会財産の回復勅令 (Edict wegen der Restitution der geistlichen Güter) を発し、一五五二年以降に世俗化されたすべての教会財産がもとの所有者に返還されるべきことを命じた。この勅令はアウグスブルグの宗教和議の教会の権利保持条項 (Ecclesiasticum Reservatum) に従つて、法律上有効なものではあつたけれども、それにもかからず、それはドイツ内のすべてのプロテスタントの領主に対する宣戦布告と同様なものであつた。何故なら、これらの領主たち、並びに彼らの親戚の者たちは、夫々が世俗化された教会の財産を保持していた。そして宗教改革派の多くの学校や制度は、かかる世俗化された財産からの収入に依存していたからである。

斯くしてこの勅令はドイツをば二つの妥協しがたい陣営―片やプロテスタント片やカソリックという二つの陣営に完全に分けてしまつたのである。当時、勝勢に乗じた皇帝フェルディナンドおよびマキシリミアン公の指揮下にあ

る帝国の軍勢およびカソリック連盟軍の力の前にあつては、プロテスタント側のこれ以上の抵抗は不可能であるように思われた。だが、この時、バルチック海の向側には冷静な頭脳と迷わされない眼をもつてドイツ内の諸事件を眺めていた一人の人物がいた。それが当時三五才、政治家でもあり、兵士でもあつたスエーデン王、グスタヴス・アドルフス (Gustavus Adolphus) である。彼の使命はスエーデンの政治的独立と経済的發展を保持し、強化することであつた。<sup>18)</sup>

### 三 スエーデン時代 (一六三〇—一六三五)

スエーデン王、グスタヴス・アドルフスに、ドイツ国内の宗教戦争への介入を最終的に決意させたものは、ハプスブルグの大海軍計画の実現に対する警戒心であつた。この計画は、ユトランドにおいてヴァレンシュタインの軍隊がデンマークのクリスチャン四世の軍隊に勝利を占めた時から皇帝側の軍部要人によつて構想されはじめたものである。この時、ユトランドの戦闘において、ヴァレンシュタインの軍に追いつめられたクリスチャン四世は沖合のフューネン (Fünen) 島に脱出して無事であつた。將軍ヴァレンシュタインはユトランドの岬に立つて、せまい海峡のベルトを越えて横たわるフューネン島を眺め、海軍力のない軍事帝国の無力を覺つたのである。

ヴァレンシュタインはこれと同じ教訓をポメラニアのシュトラールズント (Stralsund) を包囲した時にも得た。この町はリューゲン島の反対側の本土の上にはあつたけれども、実際には島と同じような場所であつて、この場所に近づくには、橋をわたつて行くよりほかに道はなかつたのである。<sup>19)</sup> ヴァレンシュタインはこの町を大規模な軍隊を展開して包囲した。だが、この町の一方は海に向つて開けており、デンマーク人やスエーデン人は船舶をつかつてこの町

の人を援助すべく、軍隊や軍需品をおくった。そのため、この町はついに占領されることはなかったのである。三〇年戦争の過程においてカソリック側の軍隊の進撃が阻止されたのは、これが最初であった。

ヴァレンシュタインは中央ヨーロッパのどまんなかにあるボヘミヤで育った。そしてデンマークのクリスチャン四世の軍隊を追って海岸に出るまでは、海というものを見たことはなかったのである。だが、ひとたび海を見ると彼は海を持つ意義を充分に理解した。そして、彼は直ぐに船舶の建造をはじめた。皇帝は彼に船舶建造に必要な権限を与えた。また、彼はバルチック海軍の総司令官となったのである。ジェズイット会派の人たちによって、これよりも約三〇年も前に考え出されていた計画が、ハプスブルグ海洋計画 (Habsburg Maritime Design) の名の下に、いまや実現することになった。ハプスブルグ当局とポーランドとの間に同盟が結ばれたことによって、皇帝側の軍隊はロシアの港を使用出来ることになった。かくて船舶と船員さえ整えば、ヴァレンシュタインの軍隊はスエーデンにまで遠征し得ることになった。かくてスカンジナビアのすべてはカソリシズムと帝国の支配下に入り得ることになったのであるが、ヴァレンシュタインが関心をもったのは、ハプスブルグ海洋計画の持つ政治的意義であった。だが皇帝フェルディナンドの主たる関心は宗教の側にあった。

当時スエーデンは建国以来ようやく一〇〇年を越えた程度の若い国家であって、ロシアおよびポーランドとの長期の闘争の結果、カレリアとリヴォニアというバルチックの二地方を手に入れ、それまで不足していた穀物入手することが出来るようになったところであった。当時ポーランドの王朝はカソリック系のヴァサ (Vasa) 家の支配下にあったが、カソリック陣営ではヴァサ家のカソリック系の君主をスエーデンの王座につけようとする計画を練っていたのであるが、こういう計画も、前記二地方の獲得という成果によって、おさえつけることが出来たのである。



だがグスタヴスの用心深さも、また征服によって得られた諸成果も、もしもハプスブルグ海洋計画が効果を發揮しはじめるならば、役に立たなくなってしまう可能性があった。その時が来るならば、帝国の軍隊は全ドイツを征服するであろう。さらに帝国の軍隊はバルチック海をわたって来てスエーデンを征服するであろう。斯様に考えたグスタヴスは、一六二九年五月三〇日に、スエーデンの議会において彼の大きいなる決意を表明した。彼は人口二百万の小国民の力を人口三千万を擁する全ドイツ帝国の力と対決させて、武力をもって運命を決しようとしたのである。かくて、一六三〇年六月二六日グスタヴスは六千名乃至一万二千名の軍隊をひきいてポメラニア沿岸のウセドム島に上陸した。だが其の後数カ月間グスタヴスの軍隊は何の成果も挙げなかったようである。そしてこの間北ドイツの諸侯たちは、中立的な態度をとって皇帝軍の侵入をまぬがれようとした。そしてスエーデンの軍隊のやることを遠くから眺める態度をとったのである。ティリーの軍隊は一六三一年五月一〇日にプロテスタンティズムを支持するマゲデブルグを占領し、大略奪をほしきままにした。さて、グスタヴスの軍隊が動き出したのはそれからのことである。グスタヴスの軍隊は、ブランデンブルグ侯領を通過して進撃を開始した。ブランデンブルグの領主は中立的な態度をとろうとしたが、グスタヴスの軍隊を阻止することは出来なかった。時の領主ゲオルク・ヴィルヘルム (Georg Wilhelm) はこの軍隊の通過を不承不承みとめたのである。それからのグスタヴス軍の進撃は破城槌のように行なわれ、ドイツの国土を貫いて行った。そして、それから数ヵ月のうちにヨーロッパは其の歴史における明白な転換点に立つに至った。ハプスブルグ海洋計画はもはや人々の耳には入らなくなつて来ていた。一六三一年九月ブライトンフェルト (Breitenfeld) の戦闘においてカソリック連盟の軍隊はグスタヴスの軍隊に完敗した。スエーデン軍はマイン河、ライン河、ダニューブ河の諸地方に進撃した。かくて、ドイツの南部深くまで進入したグスタヴスは、ヴァレンシユタ

インの軍隊がザクセンに進撃したことを知って、これと戦闘をまじえるために北方にひきかえたのである。

一六三二年の十一月にライプツィヒからそれほど離れていないリュッツェンにおいて、ヴァレンシュタインのひきいる軍隊とグスタヴスの率いる軍隊が激突した。長く、そして激しい戦闘の後スエーデン軍は勝ったけれども、グスタヴス王の戦死という非常に高価な犠牲をはらわされた。彼は騎兵隊の先頭にたつて敵陣深く斬り込んだが、濃霧の中で自国の軍隊から離れて孤立してしまい、包囲されて戦死した。そしてグスタヴスが死んだあとの戦闘は戦利品のみの獲得を狙う欲得ずくの抗争へと其の質を低下させたのである。グスタヴスは戦死したが、彼の遺した大きな業績は、カソリックの軍隊の進出を阻止し、ドイツのプロテスタントの主張を救済したことであつた。プロテスタントとカソリックの間の衝突はもはや和解しがたいものとなつたが、両宗徒の対立は諸侯間の野蛮な領土獲得競争によつてさらに複雑なものになつた。そして斯様な悲惨な状況にさらに輪をかけてのように、諸外国は政治的統轄力の弱いドイツ諸侯が、これら諸地域をドイツ民族の領土として保持して行くことが出来ない状況を利用しようとした。グスタヴスが死んだことによつて、いまやヴァレンシュタインが敵味方を通じてもつとも偉大な指導者として残つた。そして当時の他の小規模なる人物たちと違つて、大きな構想力を持っていたヴァレンシュタインはプロテスタントの信者たちを寛大に取扱うことによつて、彼らとの間に一般的な平和を樹立しようとした。だが彼の周囲の者たちは、こういう彼の啓蒙主義的な対プロテスタント政策が皇帝や皇帝を擁立するジェズイットの顧問たちを納得させることは出来ない旨を説き、ヴァレンシュタインもそれを納得したので、彼はプロテスタントの宗徒たちと秘密の交渉を開始した。そしてその結果、皇帝に対して陰謀を抱いていると疑われたのであつた。もしも彼の軍隊が周囲の状況や風評を気にせずに、あくまで彼の方針に従つて行つたなら、彼はやがて皇帝の権威を圧倒し、ドイツの混乱を終熄せしめる

ことが出来たであろう。だが彼に仕えた将卒たちは、ヴァレンシュタインが皇帝から解任されたのを知るや、彼にそむいたばかりでなく、彼らの中にはヴァレンシュタインの生命さえ狙うものさえ出て来た。こうして、彼は一六三四年二月にボヘミヤの町エーゲルで暗殺され、彼の壮大なる計画も終りを告げるのである。

スエーデンの将軍たちはグスタヴスが生前獲得したドイツにおける優勢な戦略的な立場を其の儘保持しようとして大いに努力した。政治的な方針についての指揮権は有能な宰相オクセンシュティールン（Oxenstierna）が握ることにしたが、彼オクセンシュティールンはグスタヴス王の幼少な娘・クリスチーナの名において統治権を総攬した。軍事の指導はグスタヴス王の指導を受けた将軍たちがこれを担当したのである。だが彼らの努力にもかかわらずスエーデン軍は一六三四年九月、ネルトリンゲン（Nördlingen）において、皇帝側の軍隊によって撃破され、南ドイツを撤退せねばならなくなった。皇帝はこの機会をとらえて、和平工作を開始しようと決意した。悲惨な体験は彼に和平条件の緩和の必要を痛感させた。そして彼は、いぜんとしてドイツのプロテスタンティズムの公認の指導者であったザクセンの選挙侯に対し反対の多かった教会財産の回復勅令の実質上の撤回を要件とした平和条約の締結を呼びかけ、他のすべてのプロテスタント諸侯が同平和条約に加盟すべきことを希望したのであった。この皇帝の平和提案には多くの欠陥が含まれていたが、其の中でも特に顕著であったのは、カルヴィニストの法的保護について、はっきりとした規定がないことであった。だがそれにもかかわらず、一六三五年五月、この平和提案はブラークにおいて上述の二当事者によって一つの条約へとまとめあげられたのであった。疲労困却していた当時のドイツにおいては平和への渴望が強く、ひとたび此の条約が締結されるや、それから多くの週数を数える前に、ほとんどすべての君主ならびに自由都市がこの条約に加盟したのであった。

こういうドイツの状況がもしも放置しておかれたならば、既に十七年間の戦闘で傷ついていたこの国に平和が訪れたことであろう。だが、不幸なことに戦争か平和かの決定権は当時すでにドイツ人の手中にはなかったのである。まずドイツ国内の中心部にまで軍を進め、確固とした陣營を築いていたスエーデン人たちは、戦争がもう終わったのだという考えを嘲笑した。次にフランスであるが、それまではただ金銭的にのみ、スカンジナビアのこの国を支援して来ていたフランスは、一六三五年四月に、この国と新しい同盟関係に入り、この紛争に全面的に介入することを約束したのであった。当時スエーデンは、其の偉大な王グスタフスを失ったばかりかネルトリンゲンの戦闘（一六三四年九月六日）において大打撃を蒙っていた。しかもドイツ内のカソリック宗派とプロテスタント宗派との間に和解が成立したので、これはスエーデン人にとって二重の大きな打撃であった。だが、新同盟によって、今後はフランスが彼らの味方として、たたかうことになったので、彼らは大いに意を強くした。

フランスの宰相リシュリューは、ハプスブルグ王朝に壊滅的な打撃を与える機会を、かねてから辛抱強く待機していたのであったが、ついに其の機会が来たと判断した。フランス国内の軋轢を抑止して態勢を整えたりシュリュールは一六三五年五月スペインに対し宣戦を布告し、ライン河流域に軍隊を派遣してスエーデン軍と協力態勢に入ったのである。<sup>②</sup>

#### 四 フランス時代（一六三五—一六四八）

一六三五年五月一九日にフランスの使節がブラッセルに派遣されたが、これはスペイン王に対してフランスの宣戦を告げるためであった。けれどもこの宣戦の通告が行なわれるより十二日前から既に両国は戦闘状態にあったのであ

る。<sup>②①</sup> フランス・スペイン関係は当時既に戦争直前の状態に数年間も低迷していたのである。ネルトリンゲンの戦闘が行なわれる直前、フィリップ四世はプファルツ領をバイエルン公のために保持すべく軍隊を召集していた。また、フィリップ四世は外交手段を用いてポーランドとデンマーク両国をスエーデンとの敵対関係に入らせようとしたし、また英国を説得して、プファルツ領に対する関心を打ち切らせようとした。また、ウィーン駐在のスペイン大使は、たとえ教会財産の回復に坎する勅令が放棄されるようなことになるうとも、選挙侯ならびにプロテスタントの諸君主をスペイン側に加担させるよう説得するよう訓令を受けていた。同時に、スペインはリシュリユーに対する陰謀を促進せしむべくオルレアン公およびメディチ家のマリー (Marie de Medici) に支援を与えた。また、スペインはヨーロッパの多くの場所で外交上の策謀を駆使して、今回のドイツ戦争がもはや宗教上の戦争ではなく、政治的な戦争であることを確信せしめようとした。一六四一年の後半にフランスの軍隊はモエンヴィック (Moyenvic) を占領したが、これは後でロレーヌ地方を獲得するための予備的な手段であった。だがこの時、法王の使節ビチ (Bichi) はリシュリユーに対し、ハプスブルグの領域に侵入しないよう勸説した。当時の法王はウルバヌス八世 (Urbanus VIII)<sup>②②</sup> であつて、ビチはリシュリユーとスペインの第一大臣オリヴァレスとを和解させるために全力を投入した。だが、この努力は、法王のあいまいな態度のために、中々、実を結ばなかった。ウルバヌスはドイツにおけるカソリシズムの勝利をみたいと思っていた。だが他方において彼はハプスブルグ王家を信頼していなかったのである。<sup>②③</sup>

彼はフランスに傾斜する気持をもっていた。こういう彼のスペインに対する嫌悪心は教会の最高顧問会議において一つの危機を造り出した。一六三三年三月八日にスペインの枢機卿ボルジア (彼は法王庁におけるスペイン大使をも兼ねていた) は、法王の気持がフランス側に傾斜している疑いがあるとして公然とウルバヌス八世を非難した。その

非難は其の口調から言つて、侮辱としか解釈しようがないものであった。同様に皇帝フェルディナンドは、ハンガリーのリシユリユーといわれたバスマニー（枢機卿をして法王の説得にあたらせたが、法王から何の援助を得ることも出来なかつた。法王はバスマニー（Cardinal Pazmany）の説得に応ぜず、彼と同じ宗派に属するものに対して財政的な支援を与えることを拒否した。当時法王領はウルビーノの合併により、其の最大限に達していたのであり法王の財政は豊かであつた。しかも彼は同宗派の皇帝に対して財政的支援を与えることを拒否したのである。予期しなかつた法王の拒絶に出遭つた皇帝フェルディナンドは、フランスのユグノーの政治権力を最近抑圧したカソリックのフランスと同盟関係に入りドイツにおける異端者を破壊しつくすべきか、あるいはまた、ドイツの異端と同盟関係に入つてリシユリユーに抵抗すべきかのジレンマに陥つたのである。キリスト教信仰告白者たちならびに法王の使節は、第一の解決方法をすすめた。ウィーンにおける世俗者たちの意見は、第二番目の方策に賛成であつた。律義で信仰心のあつたフェルディナンドの心中に生まれていた懷疑心と、ハプスブルグ王家の主張に対する法王のなまぬるい態度は、この戦争の抱えていた問題の混乱と複雑さを説明する。

だがリシユリユーの行為には混乱もなければ躊躇もなかつた。一六三三年九月二五日、ハプスブルグの属僚ロレーヌのシャルル四世を其の公国から追放してから五日後にフランスの軍隊はナンシーに進駐した。<sup>②④</sup>そして、法王ウルバヌスがカソリック諸国はローマにおいて会議をひらき彼らの意見の違いについて討議すべきことを提案した時、フランスは直ちに拒絶の回答をしたのであつた。ネルトリンゲンの勝利のあとにおいてさえも、皇帝は平和提案について考慮し、その実現の方途をさぐつた。だがネルトリンゲンの勝利は主としてスペイン軍隊の力によって得られたものであつたので、マドリッドの世論は戦争賛成の方向にかたまりつつあつた。一方フランスはさらに戦争の準備をす

め東部国境における領土侵奪の活動を展開拡大した。フランスはトリール選挙侯と同盟関係に入ることによってモゼル河の支配権を握った。また、高地アルサスの諸要塞やフィリップスブルグをスエーデンから獲得した。また、バスル (Basle) の司教と同盟関係に入ることによって、ライン河中流に確固とした立場を築いた。フランスの軍隊はフランシュ・コンテ (Franche Comte) の境界地帯に既に進出していた。また、ロレーヌ地方においては将来の作戦のための恰好の基地を既に獲得していた。一六三五年二月にリシュリューは連合諸州と攻撃防禦同盟を締結したが、これはスペイン領ネーデルランドからのこれら諸州の独立または分離を公認し、彼らの独立を有効なものにするためであった。こういう訳でフランスがスペインに宣戦布告をした時、驚いた人は誰もいなかった。それは、ドイツとスエーデンを結びつけてハプスブルグ王家に対抗させようとするリシュリューの政策が失敗したことから、当然予想されたことであった。フランスの政治家は死にかかっていた宗教紛争の幹に、王朝と王朝との戦争の力強い息吹きを与えたのである。十七年間もこの戦争を継続させて来た動機が、いま急に姿を消して、新しい闘争の概念が現われて来たが、こういう転換に対して誰一人文句をはさむものはいなかった。ヨーロッパ大陸の各地で行なわれて来た小規模な戦争や紛争はこうして、一つの大規模な破壊戦争へと統合されて行った。すなわち、この戦争は戦争の意味合いそのものが途中ですっかり変ってしまったのだ。これこそが一六四八年に終わった戦争が、単に戦争の継続した年数で呼ばれる理由であろう。<sup>⑦</sup>

こうして戦争に介入したフランスではあったが、フランス軍の戦場における成績は、当初のうちは、あまりかんばしいものではなかった。一六三六年にフランス軍はジールク (Sierck)、フィリップスブルグおよびトリール (Trier) をあきらめてモゼル河から撤退しなければならなかった。同年、スペインの軍隊はピカルディ (Picardy) に侵入

した。そして、パリそのものの防衛が脅威を受けるに至った時、戦争は従来よりもさらに国民的な性格を帯びるようになって来た。こうして、レゾン・デタを表面に押し出すためのより大きな理由書を得たりシユリユーは、兵士を召集するのに従来よりも困難を感じなくなって来ていた。一六三七年二月のフェルディナンド二世の死と彼の息子フェルディナンド三世の帝位継承は、戦争の経過に相違をもたらしはしなかった。但し、フェルディナンド三世は父親のフェルディナンド二世ほど熱烈なジェズイット教徒ではなかったので、戦争はそれだけ宗教的要素を失なうて行ったのである。フェルディナンド二世の死と共に戦争をはじめた世代の最後の一人が消えて行つたのである。

一六三九年のスエーデンの將軍バナーに率いられる軍隊のボヘミア侵入は、プロテスタント側の戦争遂行にとって効果的なものをほとんどもたらさなかった。何故ならばボヘミア地方はそれよりもずっと以前から掠奪され、無産荒廢の地域になっていたからである。そのため、スエーデンの軍隊は戦利品獲得の欲望を満たすことは出来なかった。彼らは無防備の住民を殺害したに過ぎぬ。ボヘミア、モラヴィア、シレジアの住民たちにとってこの頃は災難と苦悩の時代であった。多くの村落の住民は皆殺しにされ、森林や山の中で数千単位の農民が餓死した。生き残ったものも多くは神経過敏となるか、精神の均衡を失ない、その結果、迷信が流行した。將軍バナーの同僚、ザックス・ヴァイマルのベルナル（Bernard of Saxe-Weimar）は、同じ掠奪をするにしても、バナーよりも上品な名譽ある方式をとった。彼は自己の作戦をライン峡谷地帯にのみ限定し、ブライザッハ（Breisach）を包圍して一六三八一二月に降伏させたのであるが、彼は戦利品をフランス側に引渡すのを拒否した。斯様な態度をとる同盟國の將軍をシユリユーは好まなかったが、同盟者としては余りにも独立的すぎるこの將軍は、其の翌年死亡したので、シユリユーは救われた。



一六三九年の末までに、フランスはアルサスにはじめて恒久的な足場を得た。そして、一六四〇年にフランスはフランスからのみ補給と支払を受けている軍隊の力によって此の地方の征服を事実上完成したのである。同時に、アルラス(Arras)の占領はスペイン領の低地諸国(The Spanish Low Countries)を脅威した。そして一六四〇年にブランドンブルグの新しい選挙侯であるフリードリッヒ・ヴィルヘルム大選挙侯が、スエーデンとの間に中立条約を締結した時、ドイツにおけるハプスブルグ王朝の権力の基礎をゆるがそうとするリシュリユーの方策は、はっきりと具体的な形をとって来たのである。だが其のリシュリユーは、一六四二年二月四日に死亡している。

一六四三年五月一九日のフランス軍のラクロワ(Rocroi)の勝利は、フランス領土に対するスペイン軍の脅威を除き去したばかりでなく、猶お残存していたスペインの軍事上の權威を破壊したが故に重要であつた。フランス軍の指揮系統の優秀さと突撃力によって、古来からの無敵スペインの伝説はくつがえつた。

ラクロアの勝利に続いてエンギアン公——後のコンデ將軍——の率いる軍隊はフィリプスブルグを占領した。一方チュレンヌ(Turenne)將軍のひきいる軍隊はマインツとヴォルムス(Worms)を占領した。かくて、ライン河に対するフランスの制圧は復活したのである。皇帝側はこういう戦況の發展に周章狼狽した。彼らがいかに慌てふためいたかは、次のような事実からも判明する。すなわちこの年(一六四三年)にフェルディナンドはクリスチャン四世に對して、デンマークヘブレーメンとハンブルグを譲渡するという条件の下で、皇帝軍への援助を申し込もうとしたし、一方、マクシミリアンでさえも、皇帝軍とは別個にフランスとの間に講和条約を締結することを真剣に考慮したのであつた。一方、スエーデンの將軍トルステンソン(Torstensson)は北方において、フランスの將軍たちが南部であげていた戦果に劣らない大戦果をあげていた。シュレスヴィヒ・ホルシュタインに侵入したあと彼は、デンマ

ークのクリスチャン四世にブレンセブロ（Brönsebro）条約を承諾させ、デンマークが皇帝側の主張への同調を放棄せざるを得ないようにしたのである。またトランシルヴァニア領主ラコックツイ（Ratocky）は、スエーデンの宰相であり、グスタヴス王の死後約十二年間實際上の支配者であったアクセル・オクセンスチールナ（Axel Oxenstierna）の約束に慫慂されてハンガリーに侵入した。そしてスエーデンの軍隊は勢に乗じてボヘミヤに進入、この地を経由してラコックツイと手を握ろうとした。だがラコックツイが其の後、この提携を拒否したため、トルステンソンは其の後にはもっぱらハプスブルグ王朝直接支配下の諸州においてたたかい、ウィーンに対しても脅威を与えるに至った。

斯様な経過を経て皇帝は一六四五年までに、スペインを除いてすべての同盟者を失ってしまった。ザクセン選挙侯は、スエーデンの軍隊に自国の領土の通過を許可した。バイエルンはフランス側の主張に同調した。かくしてフランスの介入とスエーデンの軍事的復活によってドイツにおけるプロテスタンティズムの主張は救われたのである。

スエーデン軍の司令官であったトルステンソンは老齢のため、一六四五年にヴランゲル將軍と代った。このヴランゲル（Wrangel）はフランスの將軍チュレンヌ麾下の軍隊と自己の軍隊を合同させた。この結果フランス・スエーデン合同軍はバイエルンに侵入、マキシミリアンをして皇帝側との提携関係を断ち切らせるに至った。マキシミリアンはフランス・スペインとの間に一六四七年三月に、ウルム（Ulm）の休戦条約に調印したが、ただちに画策をはじめてスペインと連絡し、スエーデン軍を其の領土から追放しようとした。だが一六四七年中の大部分を通じてスペインの軍隊はナポリの叛乱（一六四七—一六四八）<sup>②</sup>の鎮圧に精力を奪われていた。そのため、スペイン軍の支援を計算に入れていたマキシミリアンの画策は失敗した。そのため、バイエルンは占領された。チュレンヌとヴランゲルは防

衛力のない選挙侯の領土に侵入し、ズスマルスハウゼン (Süsmarshausen) の戦闘において皇帝軍およびバイエルン軍に決定的な打撃を与えたのであった。フランス・スエーデン合同軍はこの成功にひきつづいて、ハプスブルグ王朝の所領に侵入し、ウィーンはこの戦争の開始以来、四度目の危機にさらされた。一方、コンデ将軍は、一六四八年八月二〇日、レンズ (Lens) の戦闘においてスペイン軍を撃破した。またちょうど同じ頃、ケーニクスマルク (Koenigsmarck) 麾下のスエーデンの派遣軍はボヘミヤに侵入した。プラークは烈しい攻撃にさらされたが、カソリックを信ずる住民たちの結束した抵抗は、この町の陥落をふせいだのである。ウェストファリアの講和条約が調印されたのは、それから二、三日も経たないうちであった。斯くて、戦争は、かつて戦争がはじまった場所で終ったのである。

## 注

- ① S. H. Steinberg, The 'Thirty Years War' and the Conflict for European Hegemony 1600-1660, London, 1971, P. 123.
- ② Thomas A. Walker, A History of The Law of Nations, Cambridge, 1899, P. 147.
- ③ Planket & Mowat, A History of Europe, Oxford, 1927, P. 442.
- ④ Propyläen Weltgeschichte, herausgegeben von Golo Mann und August Nischke. Siebenter Band, 1964, S. 167
- ⑤ Planket & Mowat, op. cit., P. 444.
- ⑥ H. A. L. Fisher, A History of Europe, London, 1936, P. 616.
- ⑦ H. A. L. Fisher, op. cit., P. 612.
- ⑧ Fisher, op. cit., P. 615.
- ⑨ Fisher, op. cit., P. 617.
- ⑩ Planket & Mowat, op. cit., P. 444 参照せよ S. R. Gardner, The Thirty Years' War, London, 1886, P. 83.
- ⑪ Georges Livet, La Guerre du Trente Ans, Paris, 1963, pp. 26, 27.
- ⑫ Chester P. Higby, History of Europe, Cambridge, 1927, P. 154.
- ⑬ Higby, op. cit., p. 154.
- ⑭ Livet, op. cit., p. 27.

- ⑭ Fisher, op. cit., p. 618.
- ⑮ フクトンは、其の近代史講義（一九二二年・ロンドン）の一八七頁で、彼の死が、其の生よりも崇高であったとし、其の伝説的な立往生に就いて述べている（John Emerich Edward Dalberg-Acton, Lectures on Modern History）。彼は肺結核で消耗した身体に鎧、兜をまとい、従者と共に交戦せずして死を遂げたという。一六三三年十一月十四日の事である。David Ogg, Europe in the 17th Century, London, 1925, pp. 141, 142.
- ⑯ Propyläen Weltgeschichte, herausgegeben von Golo Mann und August Nischke, Band VII, Frankfurt a. M., 1964, S. 180.
- ⑰ ティエリ・世界の歴史（大月邦雄ほか訳）第二巻 日本ブタクト・クラブ・一九七四年・三八八頁。
- ⑱ Planket & Mowat, op. cit., p. 445.
- ⑲ Ferdinand Schevill, A History of Europe from the Reformation to Our Own Day, London, 1926, pp. 250, 251, 252.
- ⑳ David Ogg, Europe in the Seventeenth Century, London, 1932, p. 161 (Valfrey, Hugues de Lyonne, ii, Introduction).
- ㉑ 一五六八年フレンチに生まれ、一六四四年七月二十九日死亡・法王在位・一六三三—一六四四年。
- ㉒ チャプマンはフィリップ四世がオリヴァレスを彼の第一大臣に選んだことは最悪の選出であったとし、彼はエネルギッシュではあったが傲慢であり壮大なプランは立てるが、詳細な事務を扱う実務的能力にかけていたと述べている。（Charles E. Chapman, A History of Spain, New York, 1950, p. 261）。
- ㉓ David Ogg, op. cit., p. 162。
- ㉔ 土智大学編・カンリット大辞典・第一巻・二七二頁。
- ㉕ 一六三三年九月二〇日のシャルム条約によつて Nancy は、ロレーヌのシャルルからフランスへ譲渡された。
- ㉖ David Ogg, op. cit., p. 163.
- ㉗ Charles E. Chapman, op. cit., p. 268.